December 2022
No.2022-004-a

第 4 章　ネガティヴ・ケイパビリティーそして、そこに直観が生まれる－

松木 邦裕（京都大学名誉教授）

Ⅰ 紹介: ネガティヴ・ケイパビリティ/負の能力

「見通しがつかない」、「わからない」との不確実な状況に留め置かれているとき、私たちに不安が迫ってくる。その状況が生命を脅かす場合は、なおさらそうである。「コロナウィルス・パンデミック」と呼ばれる事態がその典型例であることは実感されるものであろう。死に至りうる病の防御法がわからない。感染しているのか否かもわからない。治療法に確実なものはない。安心して生活できる見通しは見えない。それらの不確実さからの不安に、私たちは圧倒される。

こうしたこころの恐慌の中で即座に発生してきたものがある。確実さを主張する様々な対処法や、「ポスト・コロナ」と称するパンデミック終息後に目を向けた希望溢れる展望である。それらの速成された楽観的な七色の未来は、私たちを一瞬躁気分にし、すぐに消えていった。そして集団は攪乱され続け、私たち個々人はさらに増悪した不安に怯え続けた。

未知のものは、私たちの存在を足元から揺さぶり、ゆえに私たちは安心・安全を素早く手に入れたくなる。それは、馴染んでいるもの、既知のものに重ねられることでひとまず手に入れることができる。既に馴染んでいるものだから取り扱えると見通すのである。この手法は、未知のものを既知のものであるかのように変形し素早く答を提供することであり、ひとまずの安心はもたらすが、その未知のものは真には見つめられていないし考えられていない。

その実態は、私たちが見たいものを見て、聴きたいことしか聴いていないことである。それゆえに、未知のものに真に関わる発見も探究もなされていないままである。実のところ、そこから最初の不幸はこじれ始め、そのこじれた不幸は解き難く絡まっていくが、そのことにも気がつかない。

未知の事態を真に認識し有効な対処を為すためには、それを容易く理解したことにも神秘的で超越的なものにもしてしまわず、私たちはそこに現れてきた問いを、分からないこと、答えのないそれとしてそのまま認め、わからなさ、不確実さに持ちこたえねばならない。このこころの姿勢が、真実の発見、真の創造に不可欠である。

その持ちこたえるこころの機能が「ネガティヴ・ケイパビリティ/負の能力」(Bion, W. 1967, 松木 2009)である。そこには「レジリエンス」という用語にはない、こころの深遠さが認められる。

「ネガティヴ・ケイパビリティ」は、詩人ジョン・キーツが名付け親である(Keats, J. 1952)。キーツは 1817 年 12 月弟たちに宛てた手紙の中で、分からないこと、新しく不可解なことに出会ったときに、既に自分が持っている考えや知識、経験に当てはめてわかったことにせず、また、理由や結論を自分の望む方向に導こうとせず、わからないことをそのままわから

ないままに置いておくことができるこころの力に「ネガティヴ・ケイパビリティ」という名を与えた(Keats, J. 1817)。

キーツが記述した「ネガティヴ・ケイパビリティ」は、それからちょうど 150 年後に、精神分析の分野でウィルフレッド・ビオンによって発見され言及された。ビオンは、精神分析臨床ではそこに生起している現象を理解するために、精神分析家は分析場面に「記憶なく、欲望なく、理解なく臨みなさい」と言った。このようにこころを未飽和にしておくことこそが、こころの真実への私たちの感受性を高める。「答えは、問いを不幸にする」。そしてそこに、専門的な訓練と実践を基底に置いた直観が私たちを導くときが来る。

Ⅱ. ジョン・キーツ John Keats 1795-1821

まず、「ネガティヴ・ケイパビリティ」を最初に唱えたジョン・キーツを取り上げよう。キーツは今日も極めて高く評価されている英国ロマンティシズムの代表的詩人である。彼の 25 年間の短いその人生を示そう。

1. キーツの人生史

キーツは 1795 年 10 月 31 日ロンドンに生まれ、子ども時代から天才的な詩才が注目されていた。父親はロンドンで馬車屋を営んでいたが、キーツ 9 歳のとき落馬事故で死去した。残された母親は重篤なアルコール嗜癖で家庭を維持する力はなかった。結核に罹患し、キーツ 15 歳のとき死去する。キーツ自身も結核に罹患していた。

貧困な家庭状況からキーツは医師になることを志し、その修業に入る。同時に詩作を続け、1817 年処女作『詩集』を出版。翌 1818 年には叙事詩『エンディミオン』出版し、広く注目を集めるも、激しい批判を浴びる。同時期、弟トムは結核で死去し、キーツ自身も結核を発症する。

しかしながら 1818 年から翌年にかけて偉大なオードと称される「クレシアの骨董のオード」、「不服のオード」、「憂鬱のオード」、「ナイチンゲールへのオード」、「サイケへのオード」、「秋へ」を発表した。結核は徐々にキーツを弱らせ、友人の勧めで転地療養のためローマに過ごしたが、1821 年 2 月 23 日その地で死去する。

ローマの墓碑にはキーツ自身の希望で名前は刻まれず、「Here lies one whose name was writ in water」と刻まれた。死後、キーツの名声は至上の高みへと昇り続けた。

2. 1817 年 12 月 21 日付　弟のジョージとトーマスに宛てた手紙

詩才が爆発的に開花するその激流の只中でキーツが弟たちに宛てた手紙に、「ネガティヴ・ケイパビリティ」は記されていた。次のようである。

> 「幾つかことが私のこころで符合し、そしてただちに「達成の人」、とりわけ文学でのそれを形作るようになる資質が、私に浮かびました。シェイクスピアはそれをとても莫

大に保持していました。
それは「ネガティヴ・ケイパビリティ」、すなわち、事実や理由をいらだって得ようと努めることがまったくなく、不確実さ、神秘さ、疑惑の中にいることをある人物ができているときです。」(Keats, J. Letter to George and Thomas Keats. 21 December 1817)

キーツがシェイクスピアやコールリッジを例に挙げたように、文字によって文学の新しい世界が創造されるその達成が成就されるには、「ネガティヴ・ケイパビリティ」が小説家や詩人に求められることにキーツは思い至ったのだった。

その 150 年後ビオンは、キーツの死から 80 年後に誕生した精神分析というこころに関わる新たな専門職者に、分析場面で患者の無意識にあるものを理解しようとするとき、精神分析家にこそ「ネガティヴ・ケイパビリティ」が求められることを宣言した。

Ⅲ. ネガティヴ・ケイパビリティ: ウィルフレッド・ビオンの提示

1. ビオンという人

これから、現代の私たちに「ネガティヴ・ケイパビリティ」を知らしめたビオン(Wilfred Ruprecht Bion 1897-1979)を紹介しよう。

ビオンは英国精神分析協会に所属した精神分析家であった。おそらくメラニー・クライン、ドナルド・ウィニコット、ジャック・ラカンと並んで、創始者フロイト以降に現れた精神分析家の中でとりわけ傑出した人物である。なかでもビオンは、今日、現代精神分析に突破口をもたらす理論と技法を提示している。

人生

ビオンの人生史を極簡略に述べておこう(松木 2009, 2021b)。1897 年、祖父の代に住みついた当時の英国植民地インド、パンジャブ地方ムトラにビオンは生まれた。1905 年 8 歳で英国の寄宿制私立学校に送られる。19 歳から 21 歳までは第一次大戦で英国戦車部隊に従軍し、最前線でドイツ軍と死闘を繰り広げ、英仏の両国から勲章を授かる。1924 年オックスフォード大学に入学、卒業後母校私立学校で 1 年働くも、男子学生をかどわかしたと母親から訴えられ退職。

その後、ユニバーシティ・カレッジ病院で医学を修め、1932 年よりタビストック・クリニックで精神療法の訓練と実践に励む。1937 年より精神分析家資格のための訓練を始めるも、第二次大戦勃発のため中断する。精神科軍医として従軍し、斬新なグループ・アプローチを実践する。その従軍中に妻は出産時失血死する。

1945 年精神分析家資格訓練を再開し、クラインとの訓練分析を始める。1948 年精神分析家資格を取得し、その後は精神分析個人開業に専心。1950 年代には論文発表、1960 年代には著書を著わす。1962 年英国精神分析協会会長に就いた。1968 年求められて米国ロサンジェルスに移住する。その後、世界中からの招聘セミナーで講演し、戯曲的著書を発表する。1979 年英国に戻るが、その 1 か月後に白血病にて死去。2 か月後には招聘を受けて 72 年ぶ

りのインド訪問が予定されていたが、それは見果てぬ夢に終わった。

ビオンは 8 歳での両親との別離と見知らぬ境遇への移住、20 歳前後の壮絶な戦争体験、母校での汚名、40 歳での精神分析家資格訓練の中断、不在時の妻の死と、その人生の前半は喪失の苦痛と苦悩が繰り返された。それらを経て 51 歳で精神分析家になった人であった。その人生で、苦痛に持ちこたえることがしばしば要求されたであろうことは想像に難くない。

業績

今日もその意義が色褪せない前精神分析家時代のグループ研究を横に置くなら、精神分析での業績は大きく見れば、3 期に分かれる。

第 1 期は、ほぼ 1950 年代を占める、クラインの原初的防衛機制を臨床道具として統合失調症等の精神病状態の解明を深めた「前期ビオン」期である。

この時期のビオンは、クラインが提示した無意識的空想、スプリッティングと投影同一化、羨望、ポジション論等の概念を精神病の精神分析に活用するとともに、クラインが一者心理学で述べていたそれらを二者関係での力動的相互作用に置き替えた。そこでは臨床的キーコンセプトが情緒から思考に移された。その結果、考える機能や思考の生成と破壊が精神病理形成に寄与する様態の解明は大きく前進した(Bion, W. 1967)。

続く第 2 期、1961 年から 1964 年までは科学的演繹的方法論に依拠し、精神分析経験での「知ること」、ビオンの記号では「K」からのこころの真実探究を目指した「中期ビオン」期である。

ビオンは生きたもの同士の相互作用を著した独自な「コンテイナー/コンテインド」モデルを理論的基盤に据え、一方では思考の成熟とその思考の使われ方、もう一方では乳児-母親関係をモデルにした二者関係での情緒関係の質から精神分析場面での二者を検討した。知ること/知識の積み重ねから患者がどのようにして自身の真実を実感し、パーソナリティに収めるかに関する科学的演繹論の作成に挑んだ。それに際して表「グリッド」－思考の成熟を縦軸、思考の使用法を横軸に置くーを作成し、考えることに使われている思考を精密に規定することを試みた(Bion, W. 1963)。

最後にあたる集大成期といえる第 3 期は、1965 年から 1979 年の死去までの「後期ビオン」期である。精神分析体験の科学的演繹論の行き詰まりからビオンは前出の考えを撤回し、真実に一致 at-one-ment し体感することの無二性と、それを知ることに変形するという、知ることと真実を感知することの関係を逆転させた。そして、その実践技法を提示したが、そこに「知らないままでいること」、すなわち「記憶なく、欲望なく」、「直観」、「O になること」、「信に基づく行為」、「達成の言語」等が提示された。そしてこの文脈において「ネガティヴ・ケイパビリティ」が提示されたのであった(Bion,W. 1970)。

「ネガティヴ・ケイパビリティ」の登場

1967 年 10 月ビオンは英国精神分析協会において「ネガティヴ・ケイパビリティ」と題された講演を行った。それは前々年の「記憶と欲望」、前年の「破局的変化」の講演に引き続

いたものだった。

1963 年にビオンは精神分析的パーソナリティの構成要素として 4 点を挙げた。すなわち、生きたもの同士の相互作用的二者関係をコンセプト化した「コンテイナー/コンテインド」、知ることが愛することや憎むことと並んで感情体験であることをコンセプト化した「K 結合」、被害感への忍耐(未飽和)と安心・安全感(飽和)というこころの力動的な揺らぎをコンセプト化した「Ps⇔D」と並べた。そして最後に、四番目の要素に欲求不満の苦痛に「持ちこたえること」tolerance を挙げていた(Bion, W. 1963)。

それは、生きるのに不可欠な対象が不在であるゆえに発生する欲求不満に持ちこたえることであり、持ちこたえることがもたらす負の現実化 negative realization の結果、思考が発生すること、そこから現実検討能力が働くこころの二次過程が有効に作動することを描いた。

この達成には「知らないこと/not knowing」に持ちこたえることが不可欠な条件である。その後も「知らないこと」をビオンは重要視し、フランスの文芸評論家ブランショ Blanchot, M.の箴言「答えは、問いにとっての災いである」をしばしば口にした。それのみならずビオン自身で「答えは好奇心を殺す病である」、「答えは、好奇心を不幸、あるいは病気にする」、「知識は病気の無知である」等、言い換えたりもした(松木 2021b)。

それは、既存の知識で急いでこころを飽和してしまわないようにとの警鐘であった。ちなみに、我が国の土居健郎(1977)も「精神科面接の勘所は、・・「わからなさ」という感覚を獲得できるかというところにかかっている」と記述している。

1965 年 6 月ビオンは、「知らないこと」の実践技法として「記憶なく欲望なく」精神分析場面に臨むことを主張する(Bion, W. 1965, Mawson, C. 2014)。

記憶は無意識の影響で歪んでしまうし、欲望はフロイトの言う「願望充足」であり、未来への記憶にすぎない。精神分析場面では、思い出そうとしてはならない、欲望してはならないと戒めた。それは、患者の真実を感知するためにこころを「未飽和」な状態にしておくことであり、感知の自生的な進展を許すためである。ビオンの主唱は極めて斬新であったため、聴衆である精神分析家たちは強く戸惑った。

翌 1966 年 5 月ビオンは「破局的変化」を講演した。主旨は、既得の知識や概念から患者の無意識を解釈することを回避し、「記憶なく欲望なく」臨むことで分析家のこころが進展する。その進展が患者のこころの進展と一致するときに直観的に体験される絶対的真実、究極の現実(O、もの自体)を描いたものであり、それは破局的な体験であることだった。こころの新たな真実の獲得には、破綻や崩壊を予期させる破局を通り抜けることが必然である(Bion, W. 1966, Mawson, C. 2014)。

そしてその翌年 10 月、ビオンは英国協会での一連の講演の最後として「ネガティヴ・ケイパビリティ」を語った。

この一連の流れからわかるように、ビオンは精神分析体験で現れるこころの真実に出会うには、「記憶なく欲望なく」「知らないこと」で臨むことが不可欠であることを主張し、そ

れはフロイトの「自分を人工的に盲目にする」(Freud, S. 1916)ことであり、詩人キーツが遺した「ネガティヴ・ケイパビリティ」を育てることとして、再び伝えたのだった。その数カ月後ビオンはロンドンを離れ、1968 年 1 月からロサンジェルスに定住する。

「ネガティヴ・ケイパビリティ」講演

ビオンは、どんな内容をそのネガティヴ・ケイパビリティ講演で聴衆に伝えようとしたのか。

まずビオンは精神分析場面では、五感では感知できないものを扱おうとしていることを述べた。それゆえに訓練で得てきたものを越えた、アート的な態度が精神分析家に有用であると付け加える。

その展開からビオンは、精神分析家であれば絶対に無視できないフロイトからの一節を持ち出した。フロイトがザロメに当てた手紙の一部ー「暗部に光を当てるために、自分を人工的に盲目にします」ーを引用する(同上 p.23)。そこでは、実際の分析セッションで私たちが苦難するのは、知識や理論の不足からではなく、多すぎる知識や理論、多すぎる光のために目が眩むゆえである。それらの輝く光/知識をできるだけ排除して、ぼんやりとしたところに及ぶために暗闇を持ち込むことを主張した。

それからおもむろに、当時の英国の知識階層なら誰もが知る詩人ジョン・キーツの手紙を引用した。そこに「ネガティヴ・ケイパビリティ」が記載されていた。ビオンはキーツによる説明、「事実や理由をいらだって得ようと努めることが*まったく*なく、生半可な事実、不確実さ、神秘さ、疑惑に持ちこたえる能力」(同上 p.24)を口述した。

精神分析場面で分析家は、知らないことに持ちこたえられず、精神分析的解釈を性急に手に入れようとし始めるからである。私たちの中で的確な解釈を作り出すためには、知らないことを認識し、知らないでいることへの忍耐が何より必要であるとのことである。

その後の言及

詩を愛していたビオンのこころには「ネガティヴ・ケイパビリティ」は常にあったし、「後期ビオン」にとって重要な臨床概念であった。

思索書『熟考』(Bion, W. 1992)においてビオンは 1968 年に、「疑う能力 capacity for doubt」と言い換え、分析状況の二人が疑念、不確かさ、神秘さ、半信半疑を窒息させる方法として確かさを「性急に」見つけようとかき立てられない関係でなければならないし、疑いと不確かさが避けられる手段として何かを断定するようかき立てられてはならないことを記した。同じく『熟考』の 1969 年付に、こころの能力は無意識のネガティヴ・ケイパビリティに依拠していること、エンプティ・スペースに持ちこたえる力とも言い換えている。

1971 年 4 月ロサンジェルス精神分析協会で行った「グリッド」講演では、キーツに言及し、「行動の代用としての考えることとは対照的な、達成の言語に不可欠なものとしての半信半疑や神秘さに持ちこたえる能力」を述べた。(Bion, W. 1971/1977)

1973 年のブラジル・サンパウロでの講演では、「ネガティヴ・ケイパビリティ」という表現がいかに適切なものかを、「ネガティヴリイ ケイパブル」、「ケイパブリイ・ネガティヴ」

では不適切な表現となってしまうことを語った。それから次のように「ネガティヴ・ケイパビリティ」に言及している(Bion, W. 1974)。

「自分がどんなであるのかを認識するのにあまりに長くかかってしまう被分析者の特異さや難しさに、精神分析家はもちこたえられなければなりません。精神分析家が被分析者の言うことを解釈できるのなら、それは、その分析家がその解釈を知っているとの結論に駆け込むことなく、被分析者の言っていることにもちこたえる大きな能力を持っているに違いありません。

このことが、シェイクスピアは「ネガティヴ・ケイパビリティ」にもちこたえられたに違いないとキーツが言ったとき、彼が意図していたことだと私は思います」

(Bion, W. Brazilian Lectures 1. São Paulo.1973/1974 p.72)

Ⅳ. 精神分析とこころの臨床での「ネガティヴ・ケイパビリティ」

そうであるなら、精神分析・精神分析的心理療法、もっと広くとるなら、こころの臨床での「ネガティヴ・ケイパビリティ」とはどのような能力を言うのだろうか。そして、それはどのように必要とされているのだろうか?

心理臨床場面でのネガティヴ・ケイパビリティ

実は、それはあらゆる臨床場面に及ぶ(松木 2021a)。精神分析、心理面接の導入期・初期、そこから始まる分析や面接の経過、そしてその終結に至る終結期まで、すべての時期に求められる。

こころの治療の導入期にはパーソナリティの査定であるアセスメントを行うが、そのアセスメント期で重要なことは、「わからない」ところをそれとして認識しておくことである。アセスメント結果である診断名でその人をわかってしまわないことが重要なのである。そのためにはアセスメント面接での気づきや理解を「答え」ではなく、新たな問いに変えることを学ぶべきである。

前出したブランショの箴言「答えは、問いにとっての災いである」、ビオンの「答えは好奇心を殺す病である」はここにも当てはまる。土居健郎の「わからないというのも一種の認識である」(土居 1977)も、答えのない、わからないことにもちこたえる「ネガティヴ・ケイパビリティ」を述べている。アセスメント結果は一つの指針にすぎず、やがて出会うであろう困難・トラブル時の参照枠なのである。それは、既得の知識で急いでこころを飽和してしまわないことが、より深い理解に必要なことを伝えている。

治療導入期では傾聴と観察がまず優先される。また沈黙場面も少なくない。治療者は既成概念や既得知識を当てはめて、患者/クライエントの語ること、表すことをわかったことにして飽和してしまうことを避けなければならない。未知への恐怖や沈黙を正解で埋めようとしてはならない。患者/クライエント理解の仮説を抱くも未飽和にしておくのである。ここに「ネガティヴ・ケイパビリティ」が求められる。

それから続く治療経過、分析過程は転移と逆転移が発展していく時間であり、転移が分析場面、面接室に実在化される。そのときこそが治療者/分析家の「ネガティヴ・ケイパビリティ」が発揮されねばならない。

なぜなら転移は、患者自身の内的ペースで無意識的に形作られるものであり、分析家はその分析場面に発生する転移性の変形に自身を委ねねばならない。分析家は転移を理解できたと感じたとき、逆転移を意識化できたと感じたとき、それに基づいた尚早な解釈をせず、こころの中で十分吟味することが必要である。

転移過程には行動化も少なからず発生する。治療設定そのものを壊す行動化には断固対処する必要があるが、そうでないものには、その行動化を阻止しようとする分析家の行動化を抑止し、その意味について多くの可能性を考える必要がある。そこにも「ネガティヴ・ケイパビリティ」が求められる。

治療の行き詰まりや陰性反応も治療過程に発生しがちなものである。 その状況に陥るのは、私たち治療者が何かをわかっていないことである。そのとき、答えを早く得て解決しようとすることなく、またそれらを患者の病理や問題に帰すという他罰で処理することなく、私たちの理解や技法を点検することが必要である。ここでも知らないことに持ちこたえることが前提なのである。

そしてその治療は終結期を迎え、終結する。このとき私たちも患者も治療の成果や達成を確認したくなる。その治療を成功として終わらせたいと欲望しやすい。私たちは達成できなかったこと、至らなかったことを認めることこそが終結の現実をそのまま受け止めることである。そこにも「ネガティヴ・ケイパビリティ」が求められる。

こころの援助職でのネガティヴ・ケイパビリティ

こころの専門家の援助を必要としている人たちが抱える、その「不幸」、「生きづらさ」には 「棘」がある。彼らの過去の経験から発生している怒り、憎しみ、嫉妬、羨望、遺恨が作る「棘」は、常にその人のこころを刺している。痛み、血が流れ化膿し、こころは死にかけている。必要なそのこころの手当てのために、その人の痛むこころに私たちは出会わねばならない。見ることも触ることもできないこころに、私たちのこころを使うことで私たちはようやく出会える。

そのときその棘は、出会おうとして近づく私たちに突き刺さる。しかし、私たちはその痛みを実感し、それに持ちこたえて初めて彼らの「不幸」、「生きづらさ」を抱えたこころの本性を知る。私たちはその痛みの意味がわかるまで、その痛みに持ちこたえねばならない。そこには専門職に就いた者としての覚悟が求められる。「ネガティヴ・ケイパビリティ」はその覚悟の実践を表している。

ビオンが「患者も分析家も苦しみ(苦痛)を和らげたいと望んでいるにもかかわらず、分析経験は患者の “苦痛に苦しみつつ持ちこたえる能力”を高める」(Bion, W. 1963)と述べたことは、私たちのこころに留めて置かれねばならない。

V. 生存とネガティヴ・ケイパビリティ: 特にコロナ禍に言及して

自然は、私たちの生存を脅かす。人類史はそのまま自然との相克史でもあった。

地震、津波、森林火災、洪水という自然がもたらす物理的な脅威がある。それだけではない。生物的脅威がある。数百年前までは、熊や狼、虎等の猛獣に襲われて落命する恐怖は日常だった。

今日それらはほとんどの人たちには及ばなくなったが、眼に見えない生物の脅威は続いている。細菌やウィルスによる致死的感染症の蔓延がある。かつて何百万人が命を落としたペストやコレラの大流行があった。20 世紀初めには「スペイン風邪」と呼ばれたインフルエンザの大流行があった。そしておよそその 100 年後に私たちは、コロナウィルス・パンデミックに襲われている。

それは、決定的な予防法も治療法もないところでの死に至らしめるウィルス感染症の蔓延である。AI 社会になった今日、ウィルスの恐怖はコンピュータの中だけであり、ウィルス感染はコンピュータ用語と思っていた人たちも多かったであろう。ゆえに現実感覚でコロナ禍を把握することが難しかった。人知の成果である過去に例のないほどに向上した科学力、経済力、政治力がこの事態の解決を素早く達成すると多くの人は思った。いや、そう思い込もうとしたようである。

しばらく前に私たちを死の恐怖に陥れたが、今では致死的な病との認識が薄らいだエイズウイルス感染という同じ RNA ウィルスへの治療法が比較的早く得られたことも、脅威に圧倒される人々の不安を和らげるのに一役買ったであろう。人々はゲームの仮想現実での出来事と同じように、安心な結末がすでに内包されており、手順を踏めば対応は完璧になされ、遠くまで先は見通せていると思いたかったに違いない。その結果、コロナウィルス感染パンデミックにおいて人々は、ややもするとそれが早晩終息することを前提として「ポスト・コロナ」という再生のストーリーを展開したがった。「コロナ禍を克服し、ポスト・コロナの時代に私たちはあらゆるさらに飛躍する」と。

しかし、ポスト・コロナはやってこない。これは万能空想の典型例である。空想は空想に過ぎない。コロナ禍は続いている。それゆえの制限、拘束、そして感染の不安、死の恐怖、見通しのない閉塞感はむしろ高まっている。

私たちは喪失しているのである。こころの平和、日常の穏やかさ、人への信頼、行動の自由、経済の安定を失った。今私たちは喪失の中を生きている。そこには、見通しのなさという未来や希望の喪失も含まれる。

コロナ禍は悪夢ではない。もちろん、人類がコロナ禍を克服するという万能空想でもない。それは現実である。多くの喪失をもたらした悲しい現実である。

認識する必要があるのは、私たちは喪失の恐怖を体験しているのではなく、喪失を体験していることである。そうであるから、私たちにできることは、その喪失を認め、悲しみ、こころの痛みを味わうことである。私たちのこころを恐怖で飽和してしまわず、喪の哀悼を進めることである。

そこで次のことは知っておいてよいことかもしれない。自然に関する空想は無限であるが、自然に関する現実は有限なのである(松木 2021b)。

空想には限界や限度が存在しない。その感覚は実写やアニメーション映画や小説、コミック等の創作物で私たちは知っていることである。それは無限にどこまでも広がり、続き、行き着くところはない。ネバーエンディングストーリーとなりうるものなのである。

その一方、あらゆる現実はその限界を持つ。如何に暴発、悲惨や混乱が発生していても、そこにはおのずと限界が現れてくる。ゆえに私たちは、必ず存在するその限界にいつか行き着く。それまでの間私たちは、絶望や悲しみ、怒り、憎しみを抱え、不確実さやわからなさを生きていかねばならない(松木 2011,日下 2017)。

そうである。今私たちは、それぞれの人生という道で、恐怖、不確実さやわからなさを生きるときにいる。原因のわからなさ、対応や見通しの不確実さは、私たちの現実なのである。「仮説は事実を創り、思考は現実を創造する」(村瀬 2016)。そして、そこには空想に持ちこたえ、現実を直観する「ネガティヴ・ケイパビリティ」が求められる。

VI. 終わりに

生きることは、その人自身の人生の創造である。生きていく時間を積み重ねる中に作られるパーソナルでプライベートな物語りの創造である。そうであるから、誰であれそこに「ネガティヴ・ケイパビリティ」を働かせているのだろう。それがどれほどのものかによって、その人の人生が何処まで現実に則ったものであり、どこまで空想に染まったものかが決まるのだろう。

人生史で示したように、キーツ、ビオンともに喪失の悲しみを知る人であった。そこから、「ネガティヴ・ケイパビリティ」は発揮された。そしてそこに、真実を悟る直観は生まれた。

文献

Bion, W. 1963: The Elements of Psycho-Analysis. Heinemann. London.

Bion, W. 1965: Memory and Desire. In Mawson, C. Ed Three Papers of W.R. Bion. Routledge. 2018

Bion, W. 1966: Catastrophic Change. In Mawson, C. Ed The Complete Works of W. R. Bion. 6. 2014 Karnac Books. London.

Bion, W. 1967: Negative Capability. In Mawson, C. Ed Three Papers of W.R. Bion. Routledge. 2018

Bion, W. 1967: Second Thoughts. William Heinemann Medical Books. 中川慎一郎訳　再考：精神病の精神分析論　金剛出版 2007

Bion, W. 1970: Attention and Interpretation. Tavistock Publications. London.

Bion, W. 1974. Brazilian lectures 1. São Paulo Imago Editora. Rio de Janeiro.

Bion, W. 1977: Two Papers: The Grid and Caesura. Imago Editora. Rio de Janeiro.

Bion, W. 1992: Cogitations. Karnac Books. London.
土居健郎 1977: 方法としての面接　医学書院
Freud, S. 1916: Letter to Lou Andras-Salomé 1916.5.25. In Freud, E. Ed. Sigmund Freud, Briefe 1873-1939. S. Fischer Verlag. 1960. 生島敬三他訳 書簡集　フロイト著作集 8 人文書院 1974
日下紀子 2017: 不在の臨床　創元社
松木邦裕 2009: 精神分析体験: ビオンの宇宙　岩崎学術出版社 2009
松木邦裕 2011: 不在論　創元社
松木邦裕 2021a:　こころの臨床での「ネガティヴ・ケイパビリティ」: わからなさ、不確実さに持ちこたえること　児童思春期心理セミナー　大阪市 2021 年 7 月 11 日　ノートルダム清心女子大学　清心こころの相談室研修会 岡山市 2021 年 9 月 12 日
松木邦裕 2021b: 体系講義　対象関係論　岩崎学術出版社
Mawson, C. 2014: The Complete Works of W. R. Bion. Karnac Books. London.
村瀬雅俊 2016: 未来創成学からの挑戦